

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 竹内けん

挿絵 七海綾音

第一章

お姫様に平手打ちされました

006

第二章

お姫様に蹴り上げられました

061

第三章

お姫様に遠ざけられました

096

第四章

お姫様に殴られました

125

第五章

お姫様に握り締められました

163

第六章

お姫様に踏み潰されました

207

登場人物紹介

Characters



ジークリンデ

オルシーニ・サブリーナ二重王国の一派、サブリーナ派のお姫様。文武両道で気の強いお嬢様。

リサイア

ツヴァイクの叔母に当たる人物で、忍びを統率する妖艶な貴婦人。実は国王セリューンの愛人。

アリーシャ

ツヴァイクの幼馴染みのくノ一少女。健康的で明るい美少女。

リシュル

ツヴァイクと同郷の先輩くノ一。クールな美人。

ジュリア

サブリーナ女王の親衛隊隊長。男勝りなビキニ鎧の女戦士。

ツヴァイク

田舎から出てきたばかりの少年忍者。ジークリンデ警護の任に就く。

ギンギンに勃起しているのはともかく、亀頭を包む薄皮まで剥かれていたのだ。急に先端がジンジンと痛くなってきた。

「ほう、ほう、ほう……」

ツヴァイクは声もなかった。

悪い夢。いや、淫夢を見ているかのような気分だ。この蒼き月の如き美しき女忍びリシユルは、ツヴァイクにとっては憧れの女性の一人だ。彼女の裸を空想したことがないといえばウソになる。

しかし、あのストイックなイメージのあるお姉様が、こんなことをしてくるとは夢想だにしなかった。

「逸物を拝見したところ、いまだ女肉に浸した経験はないようですね。綺麗なピンク色です」

「……はい」

男根を摘みあげられ、しげしげと観察されるツヴァイクにはもはや抵抗する気力はない。お姉様に急所を握られた時点で、天才忍びと呼ばれた少年も、ただの哀れな童貞少年に成り下がってしまった。

「まあ、当然ですか。若頭の一番の側近であるアリーシャもあからさまにオボコですからね」

リシユルはまるでネコが生け捕りにした鼠を齧って遊ぶかの如く冷笑を浮かべる。

「若頭は、忍術の修行だけではなく、女の修行にも励まれるべきでしょうね」

「女の修行って、そんな吟遊詩人の謳うサーガじゃあるまいし……」

「まあ、色事などというものは、素人たちも熱心ですから。一見、清純そうな女ほど実は激しかったりする。特に宮廷の女たちにとって、恋愛などゲームのようなものです」

手練手管を使って成り上がる女などいくらでもいる。

「若頭は、これからそういう世界で生きるのです。いまのままでは子羊が狼の群れに飛び込むようなものですよ」

「ど、どうしろと……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？」

「わたしは、女棟梁から若頭の教育係も仰せつかっております。宮廷の雌狐たちに化かされぬよう、わたしが練習題になって差し上げましょう。どうです、女の修行はしたくないですか？」

冷たい美貌で甘く囁きながら、左手でツヴァイクの乳首をこね回し、右手で肉袋に包まれた二つの睾丸をまるで胡桃でも遊ぶように転がしてきた。

「はあう〜」

ツヴァイクは無様なまでに歓喜の声を上げて仰け反った。

いままで肉袋や乳首がこんなにも敏感な性感帯だとは考えたこともなかった少年は、暖

かく蕩けるような快感に翻弄されて、お姉様に懇願していた。

「よ、よろしくお願いします……」

「うふふ、素直なのはいいことですよ。若頭はそのままです。わたしがすべて段取りして差し上げます」

俎板の上の鯉状態。いまから自分はこのお姉様に、煮て食われるのだろうか、焼いて食われるのだろうか。

童貞少年には想像もつかなかったが、間違いなくかつて経験したことのないめくるめく快感が襲いくるのだと察した。期待と興奮のあまり、高熱があるかのように視界が歪んだ。身を起こしたリシユルは、ツヴァイクの逸物を腹のほうに押し倒し、その上に自らの股間を置いた。

そして、蒼いビスチェ状の上着の前を結ぶ紐を解き、左の乳房を露出させた。

青白い肌がぬめるように妖しく幻惑的に浮かびあがる。

ほどよい大きさに盛り上がった乳房は柔らかさそう。そのコンパクトな形ならば、忍びをするときにも邪魔にならないだろう。

頂を飾る乳首はチョココンと飛び出しているが、小さく色も薄い。

それは白刃の美しさだ。ツヴァイクが魅せられていると、リシユルが眉を顰めた。

「若頭はわたしのことが恐いですか？」

「い、いえ……」

恐いけど。恐いと面と向かって言えるはずがない。

リシユルは憂鬱そうに溜息をついた。

「わたしはどうもこの容姿のために人に恐れられることが多いのですが、いたって普通の女なんです」

普通の女は、いきなりベッドにもぐりこんできて、寝ている男を素っ裸に剥いてから、キスをするような真似はしないと思う。

「例えば、ほら？」

リシユルはツヴァイクの手を取ると、自らの乳房に添えさせた。

少年の手にほどよく収まる乳房は、しっとり汗ばんでいて、手に吸いついてくるかのようだ。

「暖かいでしょ？」

「はい」

昼間握ってしまったジークリンデの乳房より小さいが、熟れごろの媚乳である。

ツヴァイクはその触り心地に感動して、思わず優しく揉み、ツンと飛び出ている小さな乳首を摘んでしまう。

「うふふ、気に入ってくれたみたいですね」

「はい」

素直に応じたツヴァイクは、両手に握ったおっぱいを夢中になって揉んだ。

「あん、そうやって好きなように触っていいですよ。うふふふ……♪」

一見、月のように硬く冷たそうな肌なのに、手に握るおっぱいは暖かく柔らかい。

手の中で思うように形を変える乳肉は楽しく見惚れていたが、そのうちになんとも美味しそうに思えてきた。

口いっぱい頬張ってみたい。

その願望が我慢できず、幾度も唾を飲んだツヴァイクが、恐る恐るリシユルの顔を窺っていると、少年の願望を察したのだろう、お姉様は頷いた。

ツヴァイクは「待て」を解かれた犬であるかのように、目の前の美肉にむしゃぶりついた。

「うふ、うふふ……♪ 若頭ったら♪ あん♪ 激しいのね♪」

普段は冷静沈着。血が凍っているのかとさえ思える女性だが、おっぱいを揉み吸うごとに、どんどん血が通っていくのを感じる。

ツヴァイクは両手で白い乳房を持ち上げるように掴み、頂を飾る薄桃色の乳首を交互に吸った。

始めは小さな乳頭だったのだが、どんどん膨張していき、コリコリと弾力のあるものに



なっていく。

それに比例して、リシユルの上げる声も甲高くなつていった。

「はあ、はあ、あん♪ うん、いい、上手よ♪」

興奮に血走つた目の少年に乳房を好きなだけ弄ばれたお姉様は、たまらないといった様子で腰をクネクネと動かした。

リシユルの股間は、薄いショーツ越しにツヴァイクの逸物を捉えている。

「うっ……」

先走りの液を溢れさせ、逸物をピクピクと痙攣させている少年は、飽くことなくおっぱいを弄んでいた。

やがてリシユルはツヴァイクの髪を抱いて引き剥がした。

(もつと舐めていたのになぜ?)

ツヴァイクの心の声を通じたのか、リシユルは苦笑した。

「そろそろ次の段階に進みましょう」

発情している犬のような顔をしている少年を仰向けに寝かせると、少年の下半身に顔を向けて、頭部を跨いだ。

「……っ」

ツヴァイクはスレンダーなお姉様の美体を足首から仰ぎ見ることになる。

舌なめずりをしたりリシユルは、蒼いホットスリットを捲り上げた。中から現れたのは青い紐パンである。

クロッチ部分は、明らかに内側から滲み出した液体によって変色していた。

「うふふ……♪」

リシユルは童貞少年を誘惑する楽しさを思う存分に味わっているらしい。

あの蒼き月の如き冴え冴えとした美貌をしたお姉様が、こんなにも熱く淫らな表情をするとは想像したこともなかった。

少年の食い入るような視線を気持ちよさげに浴びたお姉様は、ホットスリットを腹部で腹巻き状にした。

それから豪快に膝を開き、まるで放尿するかのように腰を下ろしてきた。少年の鼻先には、小さな布切れに包まれた女性の股間がくる。

そこはグッシヨリと濡れ透けてしまっていた。リシユルはさらに手をあてがい押ししてみせたので、薄布越しに蒼い陰毛が逆立っているのが見える。

「若は、このショーツと中身、どちらがお好きですか？」

そんなの聞くまでもないではないか。ツヴァイクは中身に興味津々である。しかし、リシユルの言い回しに微妙なものを感じて、表情を窺う。

「ちょうど三年前。わたしが郷を出る前夜。若頭はわたしの寝室に忍び込み、使用済みの

シヨーツを盗んでいかれましたわよね」

ツヴァイクは頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

「……きつ！ 気づいていたの？」

「はい。若頭の忍術の基礎はわたしが手解きしたわけですから。うふふ、若頭だからこそ、あれを差し上げたんです。あのお土産を若頭がどうご使用なされたかは知りませんがね」

しかし、当然、察しはついているといった顔である。

「それで改めて質問なのですが、若はこのシヨーツとこのシヨーツに包まれたオマ○コ。どちらに興味がありますか？」

「オ、オマ○コ……舐めたいです……」

「うふふ、よかった。若頭が下着愛好者でしたら、どうしましょうと心配だったので」
動揺している少年を前に、莞爾かんじと笑ったお姉様は、股布かぶに手をかけるとグイッとばかりに左に避けた。

プンツと牝の匂いが、ツヴァイクの鼻腔いっぱい広がる。

そして、そのまま腰を下ろしてきた。さらに、両手で逸物を握り締める。

いわゆる女性上位のシックスナインとなった。

ツヴァイクは反射的にリシユルの腰を抱き、肉唇の左右に親指をあてがい広げた。

すると、トロトロトロトロ……と熱い液体が溢れて、ツヴァイクの顔にかかる。クールビューティーなお姉さんもやはり、ことここにいたって相当に興奮しているということだろう。

童貞少年もまた、興奮のしすぎで頭の中がミルク粥にでもなってしまったかのようだ。ただ牡としての本能に従い、鼻先にある女性の生殖器を観察した。

そこは蒼き月のようなお姉様の身体の一部とはとても思えない生々しさである。

サーモンピンクをした媚肉に、白い粘液がたっぷり浴びせられており、その上、ヒクヒクと痙攣しているのだ。

しかし、綺麗だと思った。

「な、舐めていいんですか？」

「い、いいですよ。ここを舐めるのが夢だったんでしよう」

たしかにツヴァイクはリシユルの女性器を何度も夢想したことがある。幾度も予行練習していただけに、身体が自然に動いた。

リシユルの太腿を押さえ抱き寄せる。まるで吸い寄せられるように夜露に濡れた女の花弁に顔を埋めた。そして、女蜜を舐める。

ペロンッ。

「あぁっ……っ」

酔っ払いに睨まれたツヴァイクは、畏怖して半歩下がる。

「いえ、そういうわけでは……」

「わたくしは、おまえなんかと違ってもう大人よ。飲みたいときに飲みたいだけ飲んだっただれにも文句言われる筋合いはないわ」

まったくもってその通りだが、やはりどこからしくないと思う。

お酒は好きなタチのようだが、ここまでベロンベロンに酔っ払っている姿ははじめて見た。

「あの、叔母上、なにかあったんですか？」

「なにかってなによ」

「例えば……」

しばし黙考して、適当に答えた。

「セリユーン陛下と喧嘩したとか？」

口にしてしまっただけからツヴァイクは後悔したが、リサイアの顔はいたって平静だった。

「たいしたことではないわよ。セリユーンの奴が、あのエトルリア王国からの外交使節団長のシグレーションとかいうオバサンと同じ部屋に入ったぐらいね」

シグレーションという女性は、パーティー会場で見かけた。三十代後半くらいの色白で上品な貴婦人だったと思う。

「別に珍しいことじゃないわ。あいつはすぐに新しい女に手を出す。もうこんなことでいちいち嫉妬してなんかいられないわ。第一、あのオバサン、エトルリアの新国王リカルドの筆下ろしをしたとか言われて、今回のクーデターの実質上指導者よ。白い狸とか呼ばれる食わせ者。セリユーンに媚びを売ったのだって、どうせなにか裏があるに違いないんだから。あの馬鹿もそれを承知で誘ったのよ」

「はあ……さようで……」

自らの性をも、政争の道具に利用する。大人って穢れているよなあ。

呆れる甥っ子に向かって、美しい叔母はいかにも秘密の話があると言いたげに手招きした。釣られて差し出した耳元で、さらなる爆弾を投げつけられる。

「でもね。今夜はわたくしが閨を共にする約束だったのよ」

「いっ!？」

硬直する甥っ子を、リサイアはベッドに引きずり込んだ。

「こんな扱いあんまりでしょ」

ベッドに仰向けに寝かされたツヴァイクの腹の上に腰を下ろした麗しい淑女は、いまだ酒気の抜けない顔を近づけて訴える。退廃的な色気に圧倒された少年は無言のまま、コンコンと頷くことしかできなかった。

「そりゃあね。わたくしなんて、あいつの数いる愛人の一人でしかないってちゃんと自覚

しているわよ。でも、わたくしほど尽くしている女はいないはずよ。ああ、尽くしても尽くしても報われない。わたくしなんて所詮は釣られた女よ。釣られた女にはもう餌はもらえないってわけね」

「こんなに綺麗でセクシーな叔母上を放って、他の女のもとに通うなんて、陛下が信じられません」

目が据わっている美女は、なにをしないでかすかわからない雰囲気がある。理屈ではなく、本能的な恐怖に駆られたツヴァイクがなんとか慰めの言葉を紡ぐと、頭をコツンと叩かれた。

「ばーか、まずは自分の頭の高エを追いなさい」

「えっと……。どういう意味で？」

「わたくしが知らないとも思っているの？ このヤリチン」

ツヴァイクの腹の上に横座りになっているリサイアの右手が、ぐいっとツヴァイクの股間をズボンの上から鷲掴みにした。

「この浮気者。おまえがどうしようもない女だったらしだということにはわかっているんだからね。いったい上京してから、何人の女の中に入ったの、このおちんちんは？」

どうやらツヴァイクの女遊び遍歴は、すっかりリサイアの把握するところのようだった。薄茶の瞳は嗜虐的な色を帯び、男の急所を握る纖手に力が込められる。

「ご、ごめんなさい」

「別に謝ることはないわよ。ただね、わたくしは、女にだらしない男って大嫌いなのよ」
叔母上がベタ惚れのセリユーン陛下は、ぼく以上の女好きだと思いますけど、という言葉
葉を吐く勇氣は、ツヴァイクにはなかった。

リサイアのほうは、なにを思ったのか、ツヴァイクのベルトを外し、ズボンとパンツを
引きずり下ろしにかかった。

「い、いきなりなにを、叔母上、やめてください」

「なによ、ヤリチンのあんたから見ても、わたくしってそんなに魅力ないってわけ？」

「へ？ いや、あの……」

いつも自信に溢れていたリサイアの顔が泣きそうに見えたのだ。その意外な表情にツヴァイクは金縛りになってしまった。

「そりゃね、わたくしはセリユーンの愛人よ。昔から尽くして尽くして尽くしまくってき
たんだから。わたくしの身体で、あいつの視線と指先と舌先と精液が浴びせられてないと
ころなんて一つもない。そんな汚されきった女に触れるのはイヤ？」

ツヴァイクは首を大きく横に振った。

「穢れているなんてとんでもない。叔母上は、ぼくの知っている中で最高の貴婦人ですよ。
ぼくの憧れであり、生涯の目標なんですから」

「さすがはヤリチン。口だけは上手いわね」

ガキのお世辞になんか乗せられないわよ、と言いたげな表情を浮かべたりサイアだが、嬉々として甥っ子の服を脱がしていった。そして、逸物を見て呆れる。

「なにこの汚いおちんちん。もう赤黒くなっているじゃない。その年で淫水焼けさせるだなんて呆れるわ」

軽蔑の視線を浴びせたりサイアだが、愛しそうにチュッと亀頭部に口付けをした。

赤い唇から滴り落ちた色香を直接男根に抽入された、そんな気分だった。男根はムクムクと若竹のように天高くそそり立ってしまう。

「うふふ……」

淫らな微笑を口元に浮かべた美女は、少年を大股開きにし、その間に身体を埋めた。

両手でそつと肉袋を掴み、それぞれの手の中に睾丸を包み込む。優しくマッサージをしながら、お尻の穴から蟻の門渡り、肉袋、肉幹、そして、亀頭の裏、さらに先端を舐めあがってきた。

（うわあ……）

ツヴァイクの背筋がゾクゾクゾクと震えた。

リシユル、アリーシャ、ジュリア、そのほか、王宮で働く少し性的欲求不満な女性たちに巧みに取り入ったツヴァイクだが、そんなままで体験した女たちとは段違いの性技で

ある。

思わず叔母を凝視してしまった。

「ん？」

若い男の男根を美味しそうにしゃぶっていたリサイアが、なにと言いたげに首を傾げた。「う、うまいんですね……」

ツヴァイクの感想に、リサイアは苦笑した。

「そりゃそうよ。わたくしはセリユーンの寵愛を得るために努力したものだ。マリーシアやヴィシユヌなんかよりも、わたくしのほうが何倍もあの人の精液飲んでいるし、注がれたし、浴びせられたわ」

自嘲しているようでいて、そのことに誇りを持っているようである。

(叔母上って、もしかしてエッチの達人?)

颯爽とした貴婦人の意外な正体に興奮する甥っ子をよそに、リサイアは臙脂色のカクテルドレスの肩紐を抜いた。

中からはブラウンの高級感溢れるハーフカップのブラジャーが姿を現した。よく見ると乳首が透けているなんともセクシーな作りだ。

いわゆる勝負下着という雰囲気である。

実際、本日は、愛しいセリユーンと思いつきり楽しむつもりだったのだろう。それが甥

っ子などに見せることになったのは不本意に違いない。

リサイアはブラジャーもそっけなく上にずりあげた。まろび出た白い乳房は、決して巨乳というものではない。年相応の大ききで形よく整っていた。乳首も小さく、いわゆる美乳というものだろう。

リサイアは、軽く自らの乳房を手に揉むと、いきり立つ男根を挟んできた。

「どお、パイズリは頭の悪い巨乳女の専売特許というわけじゃないのよ」

暖かい柔肌は、男根を包みきることはできなかつたが、シコリ立つ乳首が器用に、肉幹を擦り、エラを刺激してくる。

さらに赤い舌を伸ばしたりリサイアは、亀頭の裏を舐め、尿道口に舌先を入れてきた。

（うっ、気持ちいいいっ。叔母上つてば、やっぱりテクニシャンだあ〜）

広げた舌で亀頭部全体を舐め回し、尖らせた舌で尿道溝をなぞる。リサイアの舌技はいちいち男の急所をついてきた。女の唾液と男の先走りの液が混じり合い、男根全体を覆う。それが左右からの押しつけられる乳房で潰され、ヌッチャヌッチャといやらしい粘着質な水音を立てた。

寵姫たちと妍を競って鍛えられた性技の前に翻弄されるツヴァイクだが、ただ奉仕されているだけでは悪い気がしてきた。

「……お、叔母上、お尻をこちらに、ぼくも奉仕したい」



「若頭も、手コキなんかされているよりも、わたしのオマ○コに挿入しているほうが気持ちいいですよね」

「は、はい……」

それは否定しがたい事実である。

左腿にリサイアの股間、右腿にジュリアの股間、逸物にリシユルの股間。その上、合計六つの乳房を前にしたツヴァイクは陶然と頷いた。

おっぱいの大きさは、ジュリア、リサイア、リシユルの順番である。しかし、女の乳房は大きいなら大きいなりに、小さいなら小さいなりに味がある。

綺麗なお姉様のおっぱいなら、ツヴァイクは好き嫌いが無い。目の前のおっぱい群を夢中になって舐めしゃぶる。

そんなアホ丸出しの甥っ子を前に、リサイアが部下を睨む。

「あなた、少し調子に乗りすぎね。教育してあげる」

「まったく。おまえの部下は教育がなっていない」

ジュリアとリサイアは、このいきなりの闖入者が気に入らないという点では、気が合ったらしい。サブリナ地方とオルシーニ地方の女傑が共同戦線を張った。

この二人にかかったら、さすがのリシユルもアツという間にミンチにされてしまう。焦るツヴァイクをよそに、二人の女傑は、ツヴァイクの逸物から引き離され自由になった手

を、気持ちよさそうに座位を楽しんでいるリシユルの両脇から入れた。そして、上着の部分の紐を解き、胸元を露出させると、その色素の薄い乳首を摘んだのである。

「ああくん♪」

ツヴァイクの目の前で、リシユルの乳房が左右に広げられる。

広がる乳房とは逆に、膣洞はキュンッと締まった。

「くっ……」

思わず射精しそうになった逸物を慌ててとどめる。しかし、男根を咥え込んでいる女には、男が必死に耐えている状態だというのは手に取るようにわかるのだろう。

リシユルはブリザードアイを愉快げに輝かせて、天井裏に向かって叫んだ。

「はああん……すごい♪ アリーシャ、あんたもそんなところでいじけていないで来なさい。こういう祭りには参加しないほうが馬鹿よ」

「……っ。あ、はい……」

リシユルの呼びかけに従って、緑生地にピンクのアクセントの付いた忍装束の少女が天井裏から降りてきた。

姿を現したはいいが、どうしていいかわからないらしいアリーシャは、恥ずかしげにスカート裾を掴んでモジモジしている。

ツヴァイクとしても、三輪車を楽しんでいるところに現れた幼馴染みの少女に、なんと

声をかけていいかわからない。口を開いたのは彼女の上司だ。

「出たわね。安全パイ娘」

「安全パイ？」

リサイアの使った呼称に、ジュリアが首を傾げる。

「そう、この子の幼馴染みでね。素直になれないお年頃だけど、お互い憎からず思っているっていうやつ。ツヴァイクがいくら女遊びをして酷い目にあっても、最後にはこの娘がいると思えばこそ好き勝手できるのよねえ」

リサイアは彼女たちのおっぱいに埋もれているツヴァイクの頬をツンツンと突いた。

「ぼく、そんなことは考えてないよ……」

無自覚なツヴァイクは心外に思った。その例えはむしろ、セリユーンとリサイアの関係にこそ当てはまるだろう。

「ふうん、なるほどね」

ジュリアに品定めするようにジロジロと見られたアリーシャはいたたまれない様子でモジモジしている。

「なにをしている。おまえも、ツヴァイクの女なんだろ。参加したいなら参加しな」

「で、でも……」

アリーシャは困惑して目の前の男女の塊を見る。

ツヴァイクの身体にはすでに三人の女が取りついており、アリーシャの入り込む余地はなさそうだ。

「かまわないから、ツヴァイクの後ろから抱きついて、その大きいおっぱいを擦りつけちゃえばいいのよ。そうすれば、このスケベ坊やがさらに興奮するでしょ。今夜はこの坊やを徹底的に搾り取るよ」

「はい！」

ジュリアに煽られたアリーシャは、急いで胸元をはだけさせると、巨大な肉まんおっぱいをさらして、ツヴァイクの背後から抱きついてきた。

結果、ツヴァイクは左側にリサイア、右側にジュリア、前面にリシユル、背面にアリーシャと四方を女たちに包囲されてしまった。

ツヴァイクとしては公平に四人に逸物を挿入してやりたいが、一本しかないのだから仕方がない。せめて不満がる年上二人を宥める意味を込めて、左手をリサイアの股間に、右手をジュリアの股間に添えた。そして、蜜壺へと中指と人差し指を入れつつ、親指で陰核をこねる。

捨て置かれる形のアリーシャがかわいそうだとも思ったが、他の三人のお姉様はそれぞれ忙しい立場にあるだけに、なかなかエッチをする機会がない。その上、有能なだけに自尊心が強い方々だから、こういう乱交をさせていただけるとは思わなかった。また、いつ

このような機会があるかわからない。

それに比べてアリーシャは、身近なだけにこれからもいくらでもエッチを楽しめるだろう。埋め合わせは次回するということで、我慢してもらおうことにする。

こういう発想がすでに、アリーシャを「安全パイ」と思っている証拠なのだが、ツヴァイクは気づいていなかった。

「ふぁあん♪ この子なかなか上手くなったわね、うん……」

少年の指戯に晒されたりサイアが気持ちよさそうな吐息を漏らすと、座位で楽しんでるリシユルが答えた。

「そ、それはそうでしょう。あん、若頭はわたしが把握しているだけでも、すでに十人近い女性をとつかえひつかえコマしていますから、んんっ！」

甥っ子が女遊びに興じているとは知っていても、そこまでの数字だとは思っていなかったらしい。驚いたりサイアは、少年の背中に取りついてる少女を見た。

アリーシャがコクリと頷くと、麗しき貴婦人は頭痛がすると言いたげに顔を顰める。

「そんなに……。はあ、我が甥ながら、どうしてこんなろくでなしになっちゃったのかしら？」

「あう、淫乱なのは、んっ、オルシーニの男の特徴だろ、あはっ……」

同じく指戯に悶えながら応じたジュリアに、リサイアは反論する。

「ち、違うわよ、はう♪ オルシーニは貞節に厳しいお国柄なのよ。うんっ♪ ……この馬鹿やセリューンのせいで誤解されるけど。はぁん♪」

「くう、そうか？ あはぁ……おまえら見ているととてもそうはおもえねえけどな……」
ジュリアの感想を否定するには、現在の状況はあまりにも説得力がなかった。

問題の助平少年のほうは、もはやなにも考えずに夢中になって女肉を貪っている。腰を跳ねさせ、手を動かした。

「あん、凄い……奥に当たる……」

「はうん、このスケベが……かわいい奴……♪」

「くう、ほんと上手になったわよね……はう」

ツヴァイクの責めの前に、三人のお姉様たちは悔しながらも、快感を我慢できない。自らも盛大に腰を上下させ、ポタポタポタと滴り落ちる愛液によって、ツヴァイクの下半身はドロドロになってしまっていた。

男根が一本しかない以上、挿入しているのはリシュル一人だが、気分的には三人のお姉様と座位で楽しんでいるようだった。もちろん、背後から押しつけられる肉まんおっぱいも気持ちいい。

四方から女体に包まれたツヴァイクは、身体全体が女性の胎内に呑み込まれているような気分だった。男根といわず、身体中が性器になってしまったかのような。愛液塗れの身

体が、女たちの柔肌に弄ばれる。

合計八つのおっぱい責めに悶絶しながらも、リシユルの膣内に収まった逸物や、ジュリアやリサイアの膣内に入れた指の動きを止めないのは、スケベ少年の面目躍如であろう。しかし、ついには限界がきた。

「ああ、も、もう、……でますっ！」

情けない悲鳴と同時に、牝は牝に屈した。

「どびゅどびゅどびゅどびゅ……」

男根の脈動に合わせてリシユルの膣洞が、ヒックヒックと痙攣して搾り上げる。同時にリサイアやジュリアの胎内に入っていた指もキュンキュンと締められる。

「あああああああああ！！！」

お姉様たちの歓喜の声が三重奏になって聞こえる。

心行くまで射精したツヴァイクは、三人の美人を抱き締めたまま仰向けに倒れた。

背後から抱きついていたアリーシャが敷布団。その上から三人の女が掛け布団のように乗ってくる。暖かい女肉に包まれる極上の余韻の中、射精を終えた逸物は小さくなってリシユルの胎内から抜けた。精液を注ぎ込んだのは一人だが、どうやら、左右のお姉様たちも絶頂に導けたようである。

（はあ……、気持ちよかったあ♪）



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>